

# 清河八郎 「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

①

庄内町清川出身の幕末の志士、清河八郎(1855(安政2)年、母を連れて約半年間にわたり全国を旅行し、旅日記「西遊草」にその記録を収めた。地方のまちづくりを支援する東京のNPO法人「元気・まちネット」(矢口正武代表・戸沢村出身)は、八郎親子が旅した県内ルートを「西遊草の道」と名付け、日記に沿って検証することにした。2回に分けて行う計画で、まず前半部分の踏査に同行した。

(文)鶴岡支社・伊藤哲哉、写真)同・色摩高幸

## 親孝行、豊かな人間味

### 母を連れ大旅行

清河八郎が母の亀代と下男の貞吉を伴って伊勢参りの旅をしたのは、数え年で八郎26歳、亀代41歳の時。新潟や長野の善光寺を経由して伊勢神宮(三重県)を参拝し、金刀比羅宮(香川県)、厳島神社(広島県)、錦帯橋(山口県)まで足を延ばした。

帰路は東海道を下って江戸に1カ月ほど滞在。日光(栃木県)、福島、米沢、山形、尾花沢と北上し、清川へ戻った。今の暦で言えば5〜10月の5カ月半に及ぶ長旅だった。

「西遊草」は、この旅の道中日記。八郎は毎日宿に着くと、その日見聞きしたことなどを筆まめに書きつづった。母に老後に読んで楽しんでもらうことが目的で、弟や妹が後日伊勢参りをする際、ガイドブックとして参考にできるようにもしたという。

戦がなくならぬ街道も発達した江戸時代は庶民の旅行ブームが起り、信仰を名目にした物見遊山の旅が広まった。旅日記も多数残っているが、母を連れて大旅行をした記録は珍しい。

尊王攘夷の志士、策士とい



清河八郎記念館で「西遊草」の原本を見せてもらう  
「元気・まちネット」の踏査隊

つた八郎のイメージとは異なる、親孝行で人間味豊かな一面が伝わってくる。行く先々の名所や旅籠(はたご)の印象、女性に厳しかったという関所での出来事、茶屋の老人らから聞いた言い伝えなどが詳しく記され、優れた紀行文として作家、研究者の著書、郷土史資料などに引用される

「西遊草」は1969(昭和44)年に小山松勝一郎さん(故人)の編訳による現代語訳(平凡社・東洋文庫)が、93年には小山松さん校注の原文全文(岩波文庫)が出版された。小山松さんは現代語訳

ことも多い。作家の田辺聖子さんは、江戸時代に伊勢参りをした筑前(福岡県)の商家の女性の旅日記を基にした「姥ざかり花の旅笠」で、たびたび「西遊草」に触れ、八郎の人物像を「天性、人なつこさがあったのか、旅中も袖振り合つた旅行者たちに慕われている」と書いた。

「西遊草」は1969(昭和44)年に小山松勝一郎さん(故人)の編訳による現代語訳(平凡社・東洋文庫)が、93年には小山松さん校注の原文全文(岩波文庫)が出版された。小山松さんは現代語訳

の解説で「この書で八郎の) 国事奔走の根底となつてい性格や思想を理解することができるとし、豪放な半面、気にかけていた母との旅行を表現し、克明に記録したこまやかな愛情に人間性が表れていると指摘した。

「元気・まちネット」は八郎が学者を志して家出し、江戸へ向かつた県内ルートを「回天の道」と名付けて2009〜10年に踏査した。今回計画した「西遊草の道」の踏査前半は、清川から鶴岡市の中心部、湯田川、田川、小国などを経て新潟県境を越える地点までをたどる。

清河八郎 1830(天保元)年、清川村(庄内町清川)の裕福な造り酒屋の長男として生まれた。47(弘化4)年に家出して江戸に上り、儒学と剣の修業を積んで塾を開いた。その後、尊王攘夷(じょううい)の急進派と「虎尾の会」を結成。奉行人の手先とみられる町人風の男を斬って追われる身となり、潜伏しながら諸国の志士を結び付けたが、寺田屋事件で挫折した。63(文久3)年には幕府に働き掛けて浪士組を組織。同年暗殺された。浪士組は新徴組、新選組となり明治維新を迎えた。

初日の踏査メンバーは矢口代表ら3人。最初に清川の清河八郎記念館を訪れ、西遊草の原本(倉指指定文化財)を見せてもらった。全11巻3冊で、いずれも縦19センチ、横13センチ。草書体でよどみなく書き進めている。他に八郎が旅先で詠んだ漢詩集「奉母行」などもある。

同館は八郎たちが歩いた長い道のりを示す全国地図を展示している。1577年(慶長)に、これほどスケールの大きな旅を敢行した八郎と亀代のパワ―には脱帽する。どんな道を歩いたのか知りたい」と矢口さん。

隊員らは同館近くの八郎の生家跡に移動し、地元の人に見送られて出発。清川の集落を抜けて北楯大堰沿いの古い街道に出た。